

〔花月草紙〕狐の愚

狐のよな／＼くるを、かならず餌與ふる者ありけり、かれはけもの、うちにて、ぎえあるものなれば、かくしなばかれも惠を煮りて、むくゆることもありなんとて、目ごとに怠らすあたふれば、かれもなれになれてけり、ある日うま子生れてければ、いとことしげさに、二日ばかり餌あたふることゝをわすれにければ、きつねうらみいかりてや、そのうま子をくひてけりとぞ、

狐狩

〔古今著聞集^{十七}變化〕大納言泰通の五條坊門高倉の亭は、父侍従大納言の家にてふるき所也、相つゞ

きてすまれける程に、きつねおほく常にばけり、され共ことなる事など、玄出したる事もなれば、扱過られけるに、年をへてます／＼にばけり、る程に、大納言いかり給て、きつねがりをしたたぬをたちてんと、思て、侍共にみな其用を仰せてけり、あす下人共あまたぐしてひとりももれず皆參べし、面々につえ又弓矢など用意すべきよし仰つ、あす四方を能かためてついでのうちへ屋の上に人を立、又天井のうへに人を入れてみな狩出して、出ん所を打ころし射ころさんとさだめてけり、去程に其あかつきがたに、大納言の夢に見給ふやう、年たけえらがえろき大童子のとくさのかり衣きたる一人、西向のつぼの柑子のもとにかしこまりて居たり、大納言あれは何ものぞととひければ、おそれ／＼申けるは、是は年比此殿の御内に候もの也、われ二代迄相つゞ候ほどに、子共孫まであまたいできて候を、のづから狼藉をふるまひ候事など、心のをよび候ほどは、制し仕候へ共、用ひ候はぬによりて、今かたじけなく御勘氣にあづかり候事、尤其いはれある事にて候、明日みな命をた、れまいらすべきよしを承候、御さたのやう承及候に、まことにいかでか一人もにげのがる、もの候べき、こよひばかりの命かなしく候て、おそれ／＼うれへ申上候はんとて參候也、まげて此度の御勘當をばゆるし給はり候へ、今より後をのづからもえれごと仕候は、其時いかなる御勘當も候べき也、わか候やつばらに、此御氣色のやう申ふくめ候